

中村 竜

The Real Face

なかむら りゅう

サーファーという職業を考えても、彼が出演してきたドラマを思い返しても、京都との接点は思い付かないかもしれない。だが意外なところに関わりは潜んでいるもの。彼が京都に来て、思うこととは。

取材・文/竹中 聡(本誌)
撮影/山崎晃治
撮影協力/毘沙門堂

青年になった少年の、 職業はプロサーファー。

「ずいぶん精悍になった」。今も特別番組として続編がシリーズ化しているドラマ、「目撃流し」に出演している「俳優・中村竜」としての彼を見たとき、右の写真を見た多くの人はそんな感想を漏らすかもしれない。しかし、彼は元来、海と付き合う精悍な少年だった。

例えば、北九州や博多の高校の卒業式後というのは、界限の主立ったライヴハウスが卒業ライヴの予定で埋まり「今日オマエらはここでライヴをするんだ？」と当然のように教師が生徒に訊くという。環境とはこういうことだ。九州から優れたミュージシャンが輩出される道理である。



中村 竜 (なかむら りゅう)

76年9月11日生まれ。神奈川県鎌倉市出身。プロサーファー・俳優。競技会に出て賞金を得るのではなく、世界中の様々な土地を旅して大小問わず波に乗り、写真に収めて、また誰も行っていないところへ行き…を繰り返す「トリップ・サーファー」と呼ばれるプロ。目く「登山家や、ラリッドライダーみたいなもんですわ」、プロゴルファー・丸山茂樹、WGPライダー・原田哲也らと共に、スポーツのリサイクルアートやスポーツ選手からの環境問題提起などを行うNPO・GSA(Global Sports Alliance)のナビゲーターという肩書も持つ。

鎌倉生まれ鎌倉育ち。実家の目の前に海がある少年が波に乗るのは必然だった。「たいして街も大きくないし、遊び場もないし、波乗りするか、ウインドサーフィンか滑りか、ですね。小学生か中学生くらいでやり始めて、試合に出始めて、本格的にやるヤツが出てくる。九州で言えばライヴハウスで本格的にミュージシャンを目指すのとノリは同じでしょうね。(通っていた高校では、プロスケーターが2人、プロのモトクロッサーが1人、サーファーが3〜4人で、音楽やってるヤツが何人かいて、やることは決まってるけど、一応高校は出ておこうって感じのヤツが通ってるエクストリームな感じで) (笑)、かなり楽しかったです。彼も「波乗りを続けよう」と決めた。「それまでやってきたことで好きになれたものがあんまりなくて、テレビも出ましたけど「テレビもなあ」と(笑)。よく周りで愚痴をこぼしながら人生送ってる人もいるじゃないですか。「やだなあ、本当はやりたくないんだけどさあ」というのは絶対やだだったんで、どうせなら根こそぎ楽しんで、金も稼げて、と思うとサーフィンしかなかった。それから3年を、それまで以上に真剣に波乗りで費やし、プロサーファーになった。

波は制する対象ではなく、エネルギーをもらう相手。

以来、波乗りをやめようと思ったことはない。一言で答えることも絶対に無理だろう、何度も訊かれて辟易もしているだろう。だが訊かぬ訳にはいかない質問である。波乗りの魅力とは、

「僕が思うには、スポーツにも属するし、でも波ってエネルギーなんです、全ての。月も関係するし、雲も風も太陽も関係するし、山の空気が蒸発して、ってことから始まる。地球の、世界のエネルギーを自分の中に取り込むことができるんですよ、波に乗ることによって、それは台風のとときにワクワクするのに似ていると言う。「風がフンフン吹いてるときとか、怖いなんだけどちょっと楽しみたいな、なんかムズムズしてくる感じ。そういう(台風のような)地球のエネルギーがすーい」のを見ると、それだけでエネルギーが身体に入ったような気がするんだけど、もっと身体に取り込めるのがサーフィン。(そういう心持ちは)もともと動物にもあると思うんですけど、それが今の人間は、便利っていうか、そういう世界になって、コンクリートの中に入って(エネルギーに)接する機会が無くなっていて、孤立してるような気がするんですよ、鎌倉に修学旅行生が来て、海を見ると必ず海に向かって走っていくんですよ、そういう感じだと思っただけね。」

波という動力、風という圧力、そして海底の地熱。最もそれを感じたのは、初めて波に乗り、走ったとき。「何千kmも旅してきたうねりと地球のエネルギーと一緒に(波の上を)進んだときに、「うわあ〜」と身体の中に入ってきて、今でもそんなんだけど、その時に感じた衝撃がやっぱり一番大きい。」

自然を相手に回して行うスポーツは多い。ロッククライミング

グなどもあるだろう。登山では「山を制する」と言う。言ってみれば山という自然に打ち勝ち、制覇することでその競技は成功や完成を見る。だが彼にとって波は単に乗るのでも、ましてや制するのでもない。他のスポーツではなく、上昇気流に乗って舞う風や風を受けて木々の間を飛ぶムササビという動物と比較した方が良いのかもしれない。人間と波がフラットな状態で対峙する。「大きい波に乗ればのほど感じるエネルギーは大きいんですよ、もちろん死にも近くなってくるハイスピークなんだけど、ハイリターンもあるわけですね。その繰り返しの繰り返し。エネルギーをもらうために必要なリスクがあり、上手いもろくないときは身体が傷つ。その様は、おかしな言い方になるかもしれないが「恨みっこ無し」なのだ。「ケガをするのは当たり前ですけれど、サーファーの誰もそう思っているかどうかは解らないが、少なくとも僕はそう思っただけです。」

好きな京都と尊敬する青爺と。想い出の要所に波乗りがある。

そんな彼が「海がもつと(市内の)近くにあればなあ(笑)」と言いつつも、年に2〜3度京都を訪れる。「21〜22歳の頃かなあ。青爺(あおじい)と知り合ってから。青爺としては、サーフィンジャーナリスト、またビッグウェイバーとして世界的に有名な京都出身のプロサーファー・青山弘一氏のこと、サーファーの先達として彼がこよなく敬愛する人物である。「あんまりサーファーっぽくないというか、フラットな人で、喋りやすいし。タイミングが合えば一緒にサーフィンしたり。自身のオフィシャルサイトのトップページに「青爺」へのリンクを張るほどである。青山氏と過ごす時間はサーファーとしての原点に立ち戻ることができるのだろうか。先の「海が近くにあれば」というコメントは、こちらが「これがあれば(もしくはなければ)もつと京都が好きになるのに」と思うところは何ですか?と敢えてぶつけた質問に対する答えである。「お寺もサイコー好きだし、(京都に対して)ネガティブなイメージは無いですね。古い街並みと新しい街並みが調和してるじゃないですか。その境界線がガチツツというんじゃない、マイルドになってるっていうか、キレイに徐々に変わっていくから」という的を射た感想を述べてくれる。青山氏の存在を抜きにしても、大好きな街というのは本当のようだ。

「雰囲気は鎌倉にかなり近いですね。おつき鎌倉って感じ(笑)。お香も好き。昨日も買った。鎌倉と何が違うかなあ……。京都はキレイに観光地化されてるけど、鎌倉は家と家の間にほんぼんとお寺がある感じ」。20歳頃、初京都もやはり日本海だった。「そこへ抜ける道も良かったですね。有料道路が整備される前である。「クネクネ道を走って、荒れ狂う日本海を見て、寒い中サーフィンをさせられて(笑)。どんな思い出にも、その要所所には波乗りがある。」

自然相手なら、なお遊び上手。これからも楽しく遊び回るさ。

多くの読者にお馴染みの俳優・中村竜の誕生は、キリンレモンのCMにリアルなサーファーが必要だということでスカウトされ、アミューズという芸能事務所に入ったのがきっかけだった。以来、いくつかのドラマに出演もした。「でもやっぱりサーフィンが好きでサーフィンばかりしてたら「アンタ仕事しないから、やっぱり海に戻りなさい」と言われて(笑)。「やっぱりアンタの居場所がここじゃないわね」と(笑)。そういうイイ感じの人はやっぱり、かつての所属事務所を絶賛で、悪い思い出はない。今でも仕事のオフアワーをちよくちよくくれるという、何とも良い話だ。事務所の素性もそうだろうが、それを言わせるキャラクターもまた、素敵なのだ。例えば本人に自覚がなくても。

ひとしきりインタビューを終え、ひとつ違いの兄・中村豪氏に話を聞いている間に彼はどこかに姿を消した。どうやらひとりで毘沙門堂のあちこちを見て回っていたらしい。撮影を行っていた梅の間の襖絵に描かれた鳥が「山鳥」と「シマヒヨドリ」であることから、「鳥合わぬ」つまり「取り合わぬ」を意味する(取り次ぎの者が伝えにくいことを暗喩をもって伝えるための知恵)ことや、円山応挙が戸板に描いた、見る角度によって描かれた龍の向きが変わって見える遊び絵に、「何でこいつて、こんなトリックばかりなんですか? (笑)」と楽しそうに笑う。顔が「おもしろい」と言っている。やんちゃ坊主というのと、少し違う。例えるなら都会育ちの自然児といったところか。波乗りを仕事にしたとか、エネルギーをもらうとか、理屈を訊けば上手い言葉で返してはくれる。だが彼は遊びたいのだ。遊ぶことが好きなのだ。きつと身ひとつでできる遊びは得意なのだろう。

ドラマの中で自転車に乗っていた少年は今、世界中の波を求めて走り回る。じつとしていられない気質は、良い遊び相手を探すには最適だ。どこでも遊べてしまう彼ならば、遊び相手には事欠くまいし、相手探しの旅は数十年は続くだろう。何しろ彼がリスベクトしてやまない青爺も、御年50歳を越え、まだまだ現役のサーファーなのだから。



Information

家業がリフォーム業で、兄と共に「N Modern Design」という名でインテリアデザインも手掛ける。その和風部門「和楽」は古新一体のデザインのテーブル作りを基本とするもので、日本各地からのオーダーも。年明け早々からハワイに飛び、さらにインドネシアへ渡りトリップ・サーファーとしての仕事を終えれば、ドラマ「白線流し」の撮影に入る。放映は未定。今年中にDVDを発売予定。「これから始める人にも、これがサーフィンだよ、と思えるもの」になるという。

中村竜オフィシャルサイト ■ <http://www.t-n-f.co.jp/ryu/>
和楽オフィシャルサイト ■ <http://www.1.kamakuranet.ne.jp/waraku/>